東京工芸大学カクギョウエイさんによる T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO のファウンダー速水惟広さんへのインタビュー原文（2024 年 11 月実施）

速水惟広さんプロフィール

T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO（東京国際写真祭）ファウンダー。写真雑誌「PHaT PHOTO（ファットフォト）」編集長を経て、2017 年に上野公園にて東京で初となる屋外型国際写真祭「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO」を開催。その後、2020 年より東京駅東側エリアに舞台を移す。これまでに手掛けた主な企画展に「The Everyday -魚が水について学ぶ方法-」（共同キュレーター きりとりめでる、2022）、アレハンドロ・チャスキエルベルグ「Otsuchi Future Memories」（岩手県大槌町、2016 ほか）。最近の活動に世界報道写真財団の Joop Swart Masterclass Selection Committee メンバー（2020）、Photo Vogue Festival 審査員（イタリア、2021）、Critical Mass 審査員（米国、2022）など。

聞き手（ギョウエイ）：**写真が専門でない美術学生に、T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO を訪れる際におすすめしたい視点や楽しみ方は何ですか？また、それを通じてどんな発見をしてほしいですか？**

話し手（速水さん）：写真の専門でない美術学生からすると、「なんで写真専門のフェスティバル、なんだろう」と思うかもしれません。というのも、絵画フェスティバルや、彫刻フェスティバルはあまり聞いたことがなく、通常、芸術祭の中には絵画も彫刻も、写真も、いろんなジャンルが入ってくるからです。写真という一つのメディウムにフォーカスした芸術祭は、専門性が強く感じられ、見に行きたいという選択肢にあまり入ってこないのではないかもしれません。T3 はそれを変えていきたいと思っています。

実は、一口に写真といっても写真を専門に学んでいる人と、美術を学んでいて写真で作品を作っている人がいて、この 2 つが分かれていると。それを認めた上で、統合して見られるような場所を T3 に作りたいと思っているのです。

写真というメディウムは、わずか 200 年ほどの歴史しかありませんが、その中で培われてきた写真表現と、美術史の文脈から作られている写真表現を扱うことで、写真の可能性を提示しようと思っています。

写真は文明の利器として、コミュニケーションの手段として日常的に使われてきました。ですから議論できる範囲がものすごく広いと思っています。例えば、新聞や雑誌、あるいはインターネット、ソーシャルメディアなどで、写真がどのように拡散していくか、それがどのような意味を持ちうるかという議論をすることもできます。また「文明の中における写真」で言えば、例えば僕たちの顔が証明キーとして、スマホの解除やパスポートの認証として使われる時もありますよね。もしくは自動運転みたいに目の機能として存在する場合、あるいは私たちの趣味趣向を把握するデータとして分析の対象となる写真とでは、同じ「写真」でもカバーされる範囲が全く異なります。社会においてインフラとして存在する「写真」を切り口に私たちが生きる時代を考えていくことは、

現代のアーティストにとってもすごく有用な行為だと思っています。そのような視点から T3 を見てもらえると結構面白いではないかと思います。

聞き手（ギョウエイ）：**学生時代の速水さんは、現在のお仕事をどのように捉えていましたか？また、その頃の経験をどのように感じ取っていますか？**

話し手（速水さん）：全然捉えられなかったです。（笑）

学生時代に自分がやりたいと思っていたことや、今やっている仕事の乖離具合は、あまりにも大きすぎて想像できていませんでした。こういう仕事があるということもわかっていなかったと思います。だから、みなさんもわかっていなくても全然平気です。

聞き手（ギョウエイ）：**速水さん、元々は美術学生ですよね。**

話し手（速水さん）：僕はグラフィックデザインを勉強しました。美術専門とは言えないけど、美術史も勉強したし、アクリルペインティングとか、あとチャコールとかでも制作もしました。写真には触れてなかったですが、漫画も好きだったし「グラフィックデザインが好きだなぁ。かっこいいな」と思っていました。（笑）

でも、自分はクリエイターやデザイナーになりたいと思っていたから、今の仕事をしたいと思ったことはなかったですね。その頃の経験が生きていることがあるとすれば、クリエイターとしての気持ちは多少わかるということ。クリエイトすることに対してのリスペクトがあるということかな。

努力で開化する才能もあると思うけど、みんながみんな作家になれない。だからサポートする人がいたほうがいい。野球と一緒で、全員がピッチャーになれないし、全員がプロ野球選手になれない。コーチになる能力がすごい人や、監督があっている人もいます。雑誌だとか、メディアだとか、フェスティバルだとか、キュレーターだとか、オークションだとか、ギャラリーだとか、業界のエコシステムには重要なプレイヤーがいます。学生時代はこれほどたくさんプレイヤーがいることを知らなかったけれど、自分のような役割もこの業界には必要だと思いました。そこにプレイヤーが足りていなかったら、そこの仕事をするというのが一番いいと思い、それをずっと続けて今の仕事になったという感じです。答えになっていますか、聞きたかったことで合っていますか？大丈夫かな。（笑）

聞き手（ギョウエイ）：**大丈夫です！元々はデザイン業界のご出身で、それは今の仕事に関係していますか？**

話し手（速水さん）：当時学んでいたことはあまり生きていない気がするけど、デザインには、環境デザインだとか、コミュニケーションデザインだとか、そのように絵を描くだけのデザインではなくて、「関係性のデザイン」もある。この人とこの人が会うと面白いことが起こるのではないか。その意味で言うと、もしかしたら自分

がやっていることはデザインに近いかもしれないですね。ちょっと強引にそのような捉え方もできますね。（笑）

聞き手（ギョウエイ）：**学生に向けて、世界中の方々と円滑にコミュニケーションを取るコツや、心がけていることを教えていただけますか。**

話し手（速水さん）：興味を持つこと！

相手に興味を持つことを大事にしています。あと、もっと基本的なところからいうと、英語使おうぜ！というのはありますね。中学高校と六年間はいやでも英語はやらされていたはず、だから基本スペックはみんなあって、それ実はすごいことだと思っています。これは英語に限らなくて中国語もちょっとは読めるじゃないですか。例えば、「出口」と書いてあったら、日本人も中国人でもわかります。それはすごいこと。だから言語のコミュニケーションは実はそんなにハードルは高くない。みんな苦手意識があるだけなんです。

同時に、コミュニケーションを取ろうとする意欲がすごく大事で、とにかく間違っていてもいいからコミュニケーションを取ろうとすることが大事ですね。コミュニケーションを取ろうとするのは、相手に対して興味を持つことだと思っているのです。それは相手の年齢とかキャリアとかは関係ない。例えば、僕ならばギョウエイさんとコミュニケーションを取りながら、僕は中国の暮らしや文化は全然わからないから、中国では若い人たちはどんなことに関心を持っているのだろうか、とか、家族との関係とか、大学でどんなことを学んできたかとか、そのようなことを純粋に学びたいと思ったりします。

聞き手（ギョウエイ）：好奇心ということですね。

話し手（速水さん）：そう、好奇心です。学生の皆さんからみたら、ほとんどの人が自分よりキャリアを持っているので相手の仕事に興味を持つでしょう。でも大事なのは、興味を持っているということをどう表現するかなのです。すごく会えて嬉しいと、目をキラキラさせていたら、若いうちはそれだけで許されますが、徐々にそれだけだとダメになります。相手のことを調べるとか、相手の本を読んでみるとか、相手のやっている展示に行ってみるとか、具体的にどこに対して自分はすごく興味を持ったとか、感銘を受けたとか、少なくとも勉強してくるということがリスペクトだと思っています。

そして、常に私だったら何を提供できるのだろうかというのを考えます。例えば、先日パリに行ってポンピドゥーセンターやジュ・ド・ポーム国立美術館の学芸員たちに会ったのですが、その時もお互いの話を聞きながらも、自分たちだったらこのようなことを相手に提供できるのではないか、ということを常に考えて話すようにしています。もし相手が今、日本の写真に興味を持っていて、この時代の写真について知りたいと思っているのであれば、具体的にこういう写真家がいるよ、もしくはその領域について詳しい人たちを紹介する、とか。あるい

は、その時代が好きなのだったら、この次の世代もすごく面白いよと話をする、とか。そういうことは知識や関係性がないとできないから勉強をしておく必要がありますし、いろんな人と会って繋がりを作っておくことも大事。でも、これはテクニックの話じゃなくて、心から興味を持っているからできることなのです。それが常に雪だるまのように次の人に繋がり、次の人に繋がっていくという感じです。

聞き手（ギョウエイ）：**すごく勉強になりましたね。ありがとうございます。では、次の質問です。今回のBUG マップで特に学生に見てもらいたい「場所」を教えてください！**

話し手（速水さん）：東京ミッドタウン八重洲の 5F に POTLUCK YAESU という場所があって、そこはすごくいいと思います。まずここで T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO を開催しているでしょう（笑）。T3 PHOTO ASIA もやっているし、学生のポートフォリオ展もやっています。でもこの場所は何がいいかというと、パブリックスペースになっていて、時間は限られているのだけど、誰でも入れて無料で使えるのです。テーブルと椅子があって、そこで勉強したりとかご飯食べたり、お弁当持ってきて食べたりしてもいいですし、そのような場所は東京にあまりないですよね。あと、東京駅が眺められたりとかして、外に屋外のスペースがあるから、あそこがおすすめかな。

聞き手（ギョウエイ）：**最後に、美術学生に対して、一言を。**

話し手（速水さん）：一言というのは難しいけど、自分が心の底からやりたいと思ったことをやるということが大事ということです。

先生だとか、親だとか、友達だとか、アドバイスとしてはすごく大事だと思うのだけど、 本当に大事なのは、自分の心の声を聞くということだと思っています。アーティストになりたいといった時に、本当に自分が興味あることとはなんなのだろうと、その興味のレベルを掘り下げてみる必要があると思います。例えばコンセプチュアルなものが好きということだとしても、なぜコンセプチュアルなものが好きなのか、とか。ずっと付きまとっている問題があるのであれば、なぜ自分はこういう風に感じるのだろうかみたいなことを深いところまで探っていくと、自分がやりたいものが結構見えてくると思うのです。

それは頭で考えるというよりか、心なのですよね。これ考えている時すごく楽しいとか、これだったら俺頑張れるかもしれないとかと思えることを見つけるということがすごく大事だと思っています。でも、学生の頃にそれを見つけることは難しいかもしれません。なぜかというと、人間は想像したこと、経験したことからしか選択肢を作れなくて、例えば、医者になりたいと思ったことありますか。

聞き手（ギョウエイ）：ないです。（笑）

話し手（速水さん）：では弁護士になりたいと思ったことありますか。

聞き手（ギョウエイ）：それはあるかもしれないです！

話し手（速水さん）：僕は医者にも弁護士にもなりたいと思ったことはあまりなくて。多分それは自分の周りに医者がいなかったからだと思うのです。南極は冒険家が行く場所だと思っていたので、行きたいと思ったことは一度もなかったのだけど、最近、自分の知り合いが南極に行ったことで、本当に行けるところとして南極があるのだと思うようになりました。私たちは自分が経験しているものとか、知っている世界の範囲のものからしか選択できないのです。ということは、SNS でもなんでも同じアルゴリズムの中でグルグルしているのは気をつけたほうがいい、かもしれない。心地いい場所から一歩踏み出して、いろいろなことを経験すると見えることがあるかもしれない。もしかすると、そうしないと自分が本当にやりたいものが見つからない、かもしれない。

だから、僕からのアドバイスは知らない人に会うこと、本を読むこと、できる限り遠いところに行ってみること。距離と経験値は比例します。そういう経験をたくさん若いうちにしたほうがいい。お金はかかると思うけど、許される範囲で遠くに行ってみた方がいいですね。

聞き手（ギョウエイ）：行きたいですね！

話し手（速水さん）：そうね。でも、そういう意味で言うと、ギョウエイさんがすごいのは、大学生のうちに海外から日本に来て、そして日本語という第二言語を使って僕にインタビューをしている。それ自体がすでに普通ではやらない経験をしていて、僕からすればすごいことだと思います。だって、僕が海外に行ってフェアのディレクターやフェスティバルのディレクターに英語でインタビューをすることと一緒のことだから。それを既に今の段階でやっている。そこが素晴らしいことだと思います！（笑）

聞き手（ギョウエイ）：ありがとうございました。そう言っていただけてとても嬉しいです！これからも挑戦を続けていきたいと思います！